

# 看護基礎教育における模擬患者を活用した教育効果の検討

## —口腔ケア演習を通して（第2報）—

遠藤 順子<sup>1)</sup>・澁谷 恵子<sup>1)</sup>・菅原真優美<sup>2)</sup>

1) 東京工科大学医療保健学部看護学科

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

## Educational Effect by Using Simulated Patient in Basic Nursing Education: Through Practice on Oral Health Care(the Second Report)

Junko Endo,<sup>1)</sup> Keiko Shibuya,<sup>1)</sup> Mayumi Sugawara<sup>2)</sup>

1) TOKYO UNIVERSITY OF TECHNOLOGY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

### 要旨

本研究の目的は、学生同士および模擬患者（以下SP）を活用した「口腔ケア演習」における看護学生の学びを各演習記録から比較検討し、その教育効果を明らかにすることである。

看護学生64名の各演習記録を質的記述的分析の手続きに基づき分析した。その結果、学生同士の演習では【患者のより良い援助を考える】【学習の動機づけを得る】【口腔ケアの難しさ】など13カテゴリが抽出された。一方、SPを活用した演習では、これらに加えさらに【良好な人間関係を築くための配慮の必要性】【援助は看護師—患者の相互関係から成り立つ】【看護師の身だしなみ、言動は患者との関係に影響を及ぼす】の3カテゴリが抽出された。

SPを活用した演習で独自に抽出された3カテゴリは、模擬患者の「リアリティによる効果」である。看護教育におけるSPの活用は、学生が看護師として学ぶべき知識・技術と合わせて、看護のあり方を考える契機になることが明らかになった。

### キーワード

模擬患者、看護基礎教育、教育効果

### Abstract

The objective of the present study was to compare the learning content of nursing students in “practice on oral health care” conducted among the students themselves with content using simulated patients (SP) based on the respective practice records, and to thereby elucidate the educational effect of using SP.

The practice records of 64 nursing students were analyzed using qualitative, descriptive analysis. Based on the results, a total of 13 categories were identified for practice conducted among students, including “Devising better support for patients”, “Gaining motivation to learn”, and “Difficulty of oral health care”. For practice using SP, the following three categories were identified in addition to the above categories: “Need for consideration in establishing favorable interpersonal relationships”, “Support is a product of interactions between nurses and patients”, and “The appearance and behavior of nurses influence their relationships with patients”.

The three categories uniquely identified for practice using SP were “effects of realistic practice” associated with SP. These findings indicate that the use of SP in nursing education, along with the knowledge and techniques that must be learnt by nursing students, provides opportunities for students to consider ideal approaches in nursing.

### Key words

simulated patient, basic nursing education, educational effect

## I はじめに

模擬患者（以下SP）を活用した看護教育は、2000年頃よりその実践報告が散見されるようになった。SPを活用した教育効果としては、SPからのフィードバックが学生の気づきを高め、患者の気持ちや視点を知る<sup>1)</sup>等のSPが創り出すリアリティによって生じる効果や、主体的な学習姿勢を引き出し、学習継続を動機づける<sup>6)</sup>等の日常とは異なる学習環境が創り出す効果、そして、段階的、実践的学習を強化する模擬という状況によって生じる効果が示唆されている<sup>4)</sup>。

しかし、これらの先行研究におけるSPは養成背景も異なり、教育効果の検証までには至っていない。SPの本来の定義は、患者の単なる態度や身体的所件にとどまらない、病人特有の態度や心理的、感情的側面に至るまでに可能な限りを尽くし完全に模倣するように訓練を受けた健康人とされている<sup>7)</sup>。A大学看護学科では、一定の専門機関で訓練を受けたSPを活用した教育実践を行っており、本研究の第一報として、SPを活用した「口腔ケア演習」における学生の気づき・学び・反応について検討するため先行研究<sup>2,4,5,9,10-16)</sup>を参照した質問紙調査を実施した。

その結果、SPを活用した教育効果として、第一に学生はSPからのフィードバックや援助時の反応、模擬患者という存在自体に強く影響を受けることが明らかになった<sup>8)</sup>。これは、先行研究が示唆するSPのリアリティによって生じる効果<sup>4)</sup>を支持した。また、第二に看護師役体験の有無による学習効果の差は、学習体験の違いによる学習効果の差が生じない演習プログラムの工夫によって最小限にできることが明らかになった。看護教育機関におけるSPの活用は種々の事情により、その多くは学生全員が看護師役を体験をできない状況がある。そのため、“看護師役体験なし”の学生は“看護師役体験あり”の学生に比べて、傍

観者的な学習態度になりやすく、学習内容に差が生じる<sup>9)</sup>という指摘もあるが、演習プログラムの工夫により改善できることを示唆した。そして、これらより第三としてSPを活用した学習は、学習効果を左右する程の影響を学生に与えるため、教育効果を高めるための教育内容・方法の継続的な改善の必要性が示唆された<sup>8)</sup>。

そこで、本研究では第2報として、学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」における学生の学びを各演習記録から比較検討し、SPを活用した教育効果を明らかにすることを目的とする。

## II 方法

### 1. 用語の定義

SP：医療系大学における授業・演習等の練習の場に参加するSimulated Patient：模擬患者を示す。

### 2. 演習内容

「口腔ケア演習」は、計2回行った。第1回目として学生同士で交互に看護師役・患者役を体験する演習を行った。その後、第2回目として、患者役にSPを活用し学生の一部が看護師役を体験し、その後グループで学びを共有する演習を行った。このSPを活用する演

表1 「口腔ケア演習」プログラムのポイント

- ① 事前にSP事例を提示し、各グループで援助方法を立案する。  
・両上肢の機能障害により、自分で口腔の清潔が保持できない患者  
・70歳代                      ・男性/女性                      ・和式襦衣を着用  
・骨折の疼痛はなし  
・口を大きく開けることに遠慮がある  
・意思の疎通は問題なし  
・安静制限はなし
- ② 各グループの看護師役は、当日決定する。
- ③ 各グループは、SPへ2回援助を実施する。  
1回目と2回目の看護師役はそれぞれ別の学生が実施する。
- ④ 1回目の援助後、学生間でカンファレンスを行い、改善点を検討する。
- ⑤ 改善した方法に基づき、2回目の援助を実施する。
- ⑥ 観察者役の学生は、1,2回目とも観察の視点に基づき見学する。  
・看護師役学生の援助の良い点、改善点  
・SPの身体的・精神的な安全・安楽  
・看護師役-SPの関係、等
- ⑦ 2回目の援助後、SPと学生との合同カンファレンスを実施し、SPよりフィードバックを受ける。

習プログラムは表1に示す6つのポイントに基づき行った。

### 3. 倫理的配慮

対象者に以下について口頭および文書で説明した。①研究の目的と意義、②得られたデータの匿名性の保証、研究目的以外の使用の禁止、研究後の適切な手段による破棄、③得られたデータの厳密な管理、④研究への参加・不参加および中断の自由。⑤研究へ参加しない場合に成績など学業において不利益を受けない権利の保証、⑥研究結果の公表、⑦研究結果を知る権利の保証。また、学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」の記録は個人が特定されないように加工したコピーの提出をもって研究協力の同意が得られたと判断した。本研究は、所属施設の倫理審査委員会で承認を得た。

### 4. 調査

#### 1) 対象および調査期間

基礎看護技術「口腔ケア演習」を受講したA大学看護学科2年生85名のうち、研究協力の同意の得られた64名を対象とした。調査期間は、2011年7月である。

#### 2) 調査方法

学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」後、各演習記録の原本および氏名等個人を特定し得る箇所を削除したコピーを学生へ返却した。引き続き、研究協力依頼書の配布後、研究目的、内容、倫理的配慮について文書および口頭で説明を行い協力を依頼した。

#### 3) 分析方法

質的記述的研究<sup>17)</sup>により学生の各演習記録内容を以下の手順により分析した。

- (1) 記述された内容を意味内容の通じる記録単位に整理し、コード化する。
  - (2) コードをその類似性によりサブカテゴリに分類する。
  - (3) サブカテゴリをさらに抽象度を上げてカテゴリに分類する。
- また、分析の妥当性確保のため、分析の全

過程において研究者間で内容を吟味し各コード、サブカテゴリ、カテゴリの客観性、妥当性を検討した。

## III 結果

### 1. 対象者の属性

研究に同意の得られた学生64名を対象とした。平均年齢20.1 (SD=2.5) 歳。女性53名、男性9名、無記名2名であった。このうち「口腔ケア演習」時の看護師役経験ありの対象者は28名であり、平均年齢19.8 (SD=3.3) 歳。女性28名、男性4名、無記名2名であった。看護師役体験なしの対象者は36名であり、平均年齢20.0 (SD=2.5) 歳。女性31名、男性5名であった。

### 2. 学生同士による演習における学習効果

データ分析の結果、学生同士による演習によって得られた学生の気づき・学び・課題として分析されたコードは467にまとめられた。これらコードは、意味内容の類似性から61サブカテゴリが示され、さらに抽象化を進めることで13カテゴリが抽出された(表2、表3)。以下に導き出されたカテゴリをコード数の多い順に記述する。カテゴリは【 】, サブカテゴリは《 》で示す。

#### 【患者のより良い援助を考える】

このカテゴリは、《ブラッシング方法の工夫》《含嗽の援助の方法の工夫》《援助時の安全・安楽な体位の工夫》等の7サブカテゴリで構成される。学生は口腔ケアの技術の向上をはじめ、より良い援助を行うための援助時の患者の体位やプライバシーへの配慮等についての気づき、学びを得ている。

#### 【学習の動機づけを得る】

このカテゴリは、《患者に良い援助を実施したい》《自己の課題の明確化》《基礎的な知識をもって援助に臨む必要性》等の9サブカテゴリから構成される。看護師として患者へ良い看護を実施したいという内発的な思い

表2 学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」を通しての気づき・学び・課題 (N=64)  
一類似性による比較一

類似性	学生同士の演習		SPを活用した演習	
	カテゴリ	サブカテゴリ(コード数)	カテゴリ	サブカテゴリ(コード数)
一致したカテゴリ・サブカテゴリ	患者に適した援助のための確認の大切さ	確認をすることで患者に合った援助を行うことができる(21) 援助の適切さを患者に確認することが大切(13) 援助の確認は患者に安心感を与える(1)	患者に適した援助のための確認の大切さ	確認をすることで患者に合った援助を行うことができる(22) 援助の適切さを患者に確認することが大切(11) 援助の確認は患者に安心感を与える(8)
	援助における観察の必要性	口腔のみに集中せず患者の表情を観察する(8) 口腔内の観察の必要性(8) 観察を援助に活かす(6) 援助に集中しすぎないことが大切(5) 口腔以外に患者の全身状態の観察も大切(3)	援助における観察の必要性	観察を援助に活かす(10) 口腔以外に患者の全身状態の観察も大切(8) 口腔内の観察の必要性(4) 援助に集中しすぎないことが大切(4) 口腔のみに集中せず患者の表情を観察する(3)
	未熟な援助により患者は清潔のニードが満たされない	未熟な援助により患者は満足感を得ることができない(22) 未熟な援助は患者にストレスを与える(2)	未熟な援助により患者は清潔のニードが満たされない	未熟な援助により患者は満足感を得ることができない(10) 未熟な援助は患者にストレスを与える(1)
	患者の多様なニーズの理解	一人ひとり異なるニードを持つ(6) 患者によって気になる部分が異なる(6) 看護師と患者の感覚の違いを認識する(1)	患者の多様なニーズの理解	患者によって気になる部分が異なる(25) 看護師と患者の感覚の違いを認識する(9) 一人ひとり異なるニードを持つ(3)
	患者中心の援助を行うことの大切さ	患者中心の援助の必要性に気づく(3) 看護者中心でなく患者中心の援助を行う(2)	患者中心の援助を行うことの大切さ	看護者中心でなく患者中心の援助を行う(11) 患者中心の援助の必要性に気づく(5)
一致したカテゴリ・類似したサブカテゴリ	患者のより良い援助を考える	ブラッシング方法の工夫(51) 含嗽の援助の工夫(22) 援助時の安全・安楽な体位の工夫(9) 援助時の細やかな配慮が大切(9) 円滑なコミュニケーションを図る必要性(4) プライバシーの配慮の必要性(3) 患者の羞恥心に配慮した援助(3)	患者のより良い援助を考える	援助時の安全・安楽な体位の工夫(46) ブラッシング方法の工夫(29) 援助時の細やかな配慮が大切(16) 含嗽の援助の工夫(13) 患者の羞恥心に配慮した援助(12) 援助時の物品の配置にも注意する(8) 患者の自立を促す援助の必要性(7) プライバシーの配慮の必要性(7) 考えながら援助を行う必要性(6) 患者の気持ちになって看護することが大切(4)
	学習の動機づけを得る	患者に良い援助を実施したい(12) 自己の課題の明確化(9) 基礎的な知識を持って援助に臨む必要性(6) 援助を通して技術の根拠を理解する(5) 練習の必要性を認識する(5) 学習の積み重ねの大切さを認識する(4) 既習の学習と関連させて学びを深める(3) 他者の援助を通して自分の援助を考える(2) 口腔ケアの必要性を再認識する(2)	学習の動機づけを得る	繰り返し学習することでより良い援助を考えることができる(27) 練習の必要性を認識する(24) 患者に良い援助を実施したい(23) 根拠に基づいた援助を行う必要性(17) 自己の課題の明確化(12) 他者の考えを知ることで自己の学びが深まる(14) 模擬患者からのフィードバックのインパクト(14) 学習者としての姿勢を問直す(13) 基礎的な知識を持って援助に臨む必要性(11) 学習準備を整えることでより多くの学びを得ることができる(10) 他者の学びを通して自分の援助を考える(6) 既習の学習と関連させて学びを深める(5) 継続学習の必要性(3)
SP独自のカテゴリ・サブカテゴリ	口腔ケアの難しさ	ブラッシング圧の加減の難しさ(21) ブラッシング技術の難しさ(13) 含嗽の援助の難しさ(6) 他者の歯磨きを行うことの難しさ(3) 患者の個別性に合わせた援助の難しさ(2) 患者の意向に沿った援助の難しさ(2) 患者の安全・安楽への配慮の難しさ(1)	口腔ケアの難しさ	模擬患者に援助を行うことの緊張感(8) 患者の個別性に合わせた援助の難しさ(6) 模擬患者とのコミュニケーションの難しさ(3) ブラッシング圧の加減の難しさ(2) 他者の歯磨きを行うことの難しさ(2) 含嗽の援助の難しさ(1)
	患者の状態に応じた援助を考える必要性	患者に合った援助の方法を考えることが大切(24) 患者の意向に沿った援助の大切さ(9) 患者の個別性を認識する(6) 患者に合った物品の選択の必要性(4) 患者の生活習慣を考慮した援助の必要性(1)	患者の状態に応じた援助を考える必要性	患者に合った援助の方法を考えることが大切(24) 患者の意向に沿った援助の大切さ(18) 患者の個別性を認識する(9) 患者の生活習慣を考慮した援助の必要性(7)
	援助を受ける患者の立場を理解する	援助を受ける患者御羞恥心に気づく(22) 援助時の患者の苦痛に気づく(7) 看護師に患者の欲求を伝えることは難しい(6) 患者は看護師に遠慮がある(4) 援助を受ける患者の気持ちを理解する(2) セルフケアできないことによりストレスを生じる(2)	援助を受ける患者の立場を理解する	看護師に患者の欲求を伝えることは難しい(5) 援助を受ける患者御羞恥心に気づく(4) セルフケアできないことによりストレスを生じる(1) 援助時の患者の苦痛に気づく(1) 患者は看護師に遠慮がある(1) 気持の良い援助を受けたい(1)
	援助における説明の大切さ	患者に必要な協力を得る説明の必要性(18) 説明により患者は安心して援助を受けることができる(11) 具体的に説明することが大切(6) 説明不足は患者を不安にさせる(5)	援助における説明の大切さ	説明により患者は安心して援助を受けることができる(26) 患者に必要な協力を得る説明の必要性(18) 患者に分かりやすい言葉で説明する(10) 具体的に説明することが大切(10)
	援助時の声かけの必要性と効果の理解	患者が答えやすい声かけの工夫(9) 援助時の声かけの必要性(6) 声かけのタイミングを考える必要性(4) 声かけにより患者が安心して援助を受けることができる(3) 無言で援助をされると患者は不安になる(1)	援助時の声かけの必要性と効果の理解	援助時の声かけの必要性(34) 声かけにより患者が安心して援助を受けることができる(19) 声かけのタイミングを考える必要性(12)
	良い援助は患者に満足感をもたらす	適切な援助は患者に満足感を与えることができる(6) 丁寧な援助により患者は爽快感を得ることができる(4) 適切な援助を受けることによって、患者は羞恥心よりも爽快感を得ることができる(1)	良い援助は患者に満足感をもたらす	適切な援助は患者に満足感を与えることができる(7) 丁寧な援助を受けることで患者の清潔のニードが高まる(3) 丁寧な援助により患者は爽快感を得ることができる(2)
			良好な関係を築くコミュニケーションの必要性	患者に安心感を与える雰囲気の大切さ(21) 話す時に適切なアイコンタクトを行う(8) 看護師から積極的に声をかける(7) 看護師の笑顔は患者に安心感を与える(6) 看護師の不用意な音動に注意する(5) 患者に応じた言葉遣いの必要性(5) 円滑なコミュニケーションを図る必要性(2) 看護を通して良い人間関係を築く必要性(2)
		看護師の身だしなみ、言動は患者との関係に影響を及ぼす	看護師の身だしなみの乱れは患者に不快感を与える(7) 看護師の良い身だしなみは患者に安心感を与える(6) 看護師の身だしなみの大切さを認識する(6) 常識ある行動の大切さ(3)	
		援助は看護師-患者の相互関係から成り立つ	看護師の緊張は患者に伝わる(9) 看護師の自信のない態度は患者を不安にさせる(3) 看護師自身が意識していない言動が患者に影響を与えることに気づく(2) 看護師の誠意は患者に伝わる(1)	

表3 学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」を通しての気づき・学び・課題 (N=64)  
—カテゴリ数による比較—

学生同士の演習			SPを活用した演習		
順位	カテゴリ	コード数 (%)	順位	カテゴリ	コード数 (%)
1	患者のより良い援助を考える	101 (21.6%)	1	学習の動機づけを得る	179 (22.7%)
2	学習の動機づけを得る	48 (10.3%)	2	患者のより良い援助を考える	148 (18.8%)
2	口腔ケアの難しさ	48 (10.3%)	3	援助時の声かけの必要性和効果の理解	65 (8.2%)
3	患者の状態に応じた援助を考える必要性	44 (9.4%)	4	援助における説明の大切さ	64 (8.1%)
4	援助を受ける患者の立場を理解する	43 (9.2%)	5	患者の状態に応じた援助を考える必要性	58 (7.4%)
5	援助における説明の大切さ	40 (8.6%)	6	良好な関係を築くコミュニケーションの必要性	56 (7.1%)
6	患者に適した援助のための確認の大切さ	35 (7.5%)	7	患者に適した援助のための確認の大切さ	41 (5.2%)
7	援助における観察の必要性	31 (6.6%)	8	患者の多様なニーズの理解	37 (4.7%)
8	未熟な援助により患者は清潔の二ードが満たされない	25 (5.4%)	9	援助における観察の必要性	29 (3.7%)
9	援助時の声かけの必要性和効果の理解	23 (4.9%)	10	口腔ケアの難しさ	22 (2.8%)
10	患者の多様なニーズの理解	13 (2.8%)	10	看護師の身だしなみ・言動は患者との関係に影響を及ぼす	22 (2.8%)
11	良い援助は患者に満足感をもたらす	11 (2.4%)	11	患者中心の援助を行うことの大切さ	16 (2.0%)
12	患者中心の援助を行うことの大切さ	5 (1.1%)	12	援助は看護師—患者の相互関係から成り立つ	15 (1.9%)
			13	援助を受ける患者の立場を理解する	13 (1.6%)
			14	良い援助は患者に満足感をもたらす	12 (1.5%)
			15	未熟な援助により患者は清潔の二ードが満たされない	11 (1.4%)
	総コード数 (%)	467 (100%)		総コード数 (%)	788 (100%)

と、そのための学習の必要性が認識されていた。

#### 【口腔ケアの難しさ】

このカテゴリは、《ブラッシング圧の加減の難しさ》《ブラッシング技術の難しさ》《含嗽の援助の難しさ》等の7サブカテゴリから構成され、口腔ケアの技術そのものの難しさに対する気づきを改めて得ていた。

#### 【患者の状態に応じた援助を考える必要性】

このカテゴリは、《患者に合った援助の方法を考えることが大切》《患者の意向に沿った援助の大切さ》《患者の個性を認識する》等の5サブカテゴリから構成される。一人ひとりの患者の思いや好みに合った援助の必要性について気づき、学びを得ている。

#### 【援助を受ける患者の立場を理解する】

このカテゴリは、《援助を受ける患者の羞恥心に気づく》《援助時の患者の苦痛に気づく》《看護師に患者の欲求を伝えることは難しい》等の6サブカテゴリから構成される。患者の立場になって援助をすることへの気づきから援助を受ける患者の気持ちに対する理

解を深めている。

#### 【援助における説明の大切さ】

このカテゴリは、《患者に必要な協力を得る説明の必要性》《説明により患者は安心して援助を受けることができる》《具体的に説明することが大切》等の4サブカテゴリから構成される。患者に適切な援助を行うために、また、患者の持っている能力を最大限に活かすために、より具体的で分かりやすい説明の大切さに気づき、学びを得ている。

#### 【患者に適した援助ための確認の大切さ】

このカテゴリは、《確認することで患者に合った援助を行うことができる》《援助の適切さを患者に確認することが大切》《援助の確認は患者に安心感を与える》の3サブカテゴリから構成される。患者の好みや習慣に応じた心身ともに苦痛のない気持ちの良い援助を行うためには、知識に基づいた技術に終始するのではなく、援助の適切性について患者自身に確認し援助へ活かすことの大切さについて気づき、学びを得ている。

#### 【援助における観察の必要性】

このカテゴリは、《口腔のみに集中せず患者の表情を観察する》《口腔内の観察の必要性》《観察を援助に活かす》等の5サブカテゴリから構成される。援助の始まりから終わりまでの全過程における観察のそれぞれの意味に気づき、また、援助時の口腔以外の患者全体の観察の必要性について学びを得ている。

【未熟な援助により患者は清潔のニードが満たされない】

このカテゴリは、《未熟な援助により患者は満足感を得ることができない》《未熟な援助は患者にストレスを与える》の2サブカテゴリから構成され、看護師の援助技術の質によっては、援助自体が患者への負担となり得ることについて気づきを得ている。

【援助時の声かけの必要性和効果の理解】

このカテゴリは、《患者が答えやすい声かけの工夫》《援助時の声かけの必要性》《声かけのタイミングを考える必要性》等の5サブカテゴリから構成され、援助における適切な声かけは患者に合った援助の一助となり得ること、そして、声かけの内容やタイミングなどに考慮することについての気づき、学びを得ている。

【患者の多様なニーズの理解】

このカテゴリは、《一人ひとり異なるニードを持つ》《患者によって気になる部分が異なる》《看護師と患者の感覚の違いを認識する》の3サブカテゴリから構成され、看護師は援助において患者一人ひとりのニードや感覚の違いに敏感であり、速やかに対応する必要性について理解を深めている。

【良い援助は患者に満足感をもたらす】

このカテゴリは、《適切な援助は患者に満足感を与えることができる》《丁寧な援助により患者は爽快感を得ることができる》《適切な援助を受けることによって、患者は羞恥心よりも爽快感を得ることができる》の3サブカテゴリから構成される。適切な援助によって患者のニードが満たされることを通し

て、援助することについての理解を深めている。

【患者中心の援助を行うことの大切さ】

このカテゴリは、《患者中心の援助の必要性に気づく》《看護師中心でなく患者中心の援助を行う》の2サブカテゴリから構成され、援助は看護師の考えた通りに行うものではなく、患者を中心に考えて行うことの大切さを再確認している。

### 3. SPを活用した「口腔ケア演習」における学習効果

SPを活用した演習によって得られた学生の気づき・学び・課題として分析されたコードは788にまとめられた。これらコードは、意味内容の類似性から80サブカテゴリが示され、さらに抽象化を進めることで16カテゴリが抽出された(表2)。このうち、13カテゴリは学生同士による演習で抽出されたカテゴリと同様であった。そして、以下の3カテゴリ(表2 SP独自のカテゴリ・サブカテゴリ部分)は独自に抽出された。

【良好な人間関係を築くコミュニケーションの必要性】

このカテゴリは、《患者に安心感を与える雰囲気の大切さ》《話す時に適切なアイコンタクトを行う》《看護師から積極的に話しかける》《看護師の笑顔は患者に安心感を与える》《看護師の不用意な言動に注意する》《患者に応じた言葉遣いの必要性》《円滑なコミュニケーションを図る必要性》《看護を通して良い人間関係を築く必要性》の8サブカテゴリから構成され、ケアにおける患者とのバーバルおよびノンバーバルなコミュニケーションが強く意識されていた。

【看護師の身だしなみ、言動は患者との関係に影響を及ぼす】

このカテゴリは、《看護師の身だしなみの乱れは患者に不快感を与える》《看護師の良い身だしなみは患者に安心感を与える》《看護師の身だしなみの大切さを認識する》《常

識ある行動の大切さ》の4サブカテゴリから構成され、ケアにおける看護師の態度面に注意が向いている。

#### 【援助は看護師－患者の相互関係から成り立つ】

このカテゴリは、《看護師の緊張は患者に伝わる》《看護師の自信のない態度は患者を不安にさせる》《看護師自身が意識していない言動が患者に影響を与えることに気づく》《看護師の誠意は患者に伝わる》の4サブカテゴリから構成され、ケアが成立するための人と人との関係性についての気づきを深めていた。

### 4. 学生同士およびSPを活用した「口腔ケア演習」における学習効果の比較

#### 1) 類似性による比較

(1) カテゴリ・サブカテゴリが完全に一致したのは、【患者に適した援助のための確認の大切さ】【援助における観察の必要性】【未熟な援助により患者は清潔のニードが満たされない】【患者の多様なニーズの理解】【患者中心に援助を行うことの大切さ】の5カテゴリであった。

(2) カテゴリが一致し類似したサブカテゴリで構成されるものは、【患者のより良い援助を考える】【学習の動機づけを得る】【口腔ケアの難しさ】【患者の状態に応じた援助を考える必要性】【援助を受ける患者の立場を理解する】【援助における説明の大切さ】【援助時の声かけの必要性と効果の理解】【良い援助は患者に満足感をもたらす】の8カテゴリであった。

#### 2) コード数による比較

学生同士の演習での総コード数は468コード、SPを活用した場合は788コードであった。

(1) 【患者のより良い援助を考える】は、学生同士による演習では上位1位、SPを活用した演習では上位2位であったが、SPを活用した場合、学生同士の演習と比較して3サブカテゴリ多く抽出された。特に、《援助時の安全・安楽な体位の工夫》は約5倍、《患者

の羞恥心に配慮した援助》は約4倍、《援助時の細やかな配慮の大切さ》は約2倍以上のコード数であった。

(2) 【学習の動機づけを得る】は、学生同士による演習では上位2位、SPを活用した演習では上位1位であったが、SPを活用した場合、学生同士の演習と比較して4サブカテゴリ多く抽出され、コード数は約3倍以上であった。特に、《練習の必要性を認識する》は約5倍、《患者に良い援助を実施したい》は約2倍、《基礎的な知識を持って援助に臨む必要性》は約2倍のコード数であった。

(3) 学生同士による演習の上位3位は【口腔ケアの難しさ】であったが、SPを活用した演習では16カテゴリ中10位であった。サブカテゴリ数における大差は認められなかったが、コード数は約2分の1と減少していた。

(4) SPを活用した演習の上位3位は【援助時の声かけの必要性と効果の理解】であったが、学生同士による演習では13カテゴリ中9位であった。総コード数は約3倍、《援助時の声かけの必要性》および《声かけにより患者は安心して援助を受けることができる》で約6倍、《声かけのタイミングを考える必要性》で約3倍と増加していた。

## IV 考察

### 1. SPを活用した演習の教育効果の特徴

SPを活用した演習を通しての気づき・学び・課題は、学生同士による演習を通して抽出された13カテゴリに加えて、さらに【良好な人間関係を築くコミュニケーションの必要性】【看護師の身だしなみ、言動は患者との関係に影響を及ぼす】【援助は看護師－患者の相互関係から成り立つ】の3カテゴリが独自に抽出された。

これは、SPのリアリティによる効果<sup>4)</sup>であると考えられる。看護は、行われる看護行為そのものを通して、それを行う者の知識・技術・態

度がそのまま看護を受ける対象に伝わる<sup>17)</sup>。そのため、援助においては看護師の知識・技術・態度の全てが不可欠であるが、学生は援助を受けるSPのリアリティによって、模擬患者がつくり出す現実<sup>10)</sup>に否応なく巻き込まれ、感情が揺さぶられる。その結果、学生はSPに自分の援助を受け入れてもらうために《話す時に適切なアイコンタクトを行う》こと、《看護師から積極的に声をかける》こと、《看護師の笑顔は患者に安心感を与える》こと、《患者に安心感を与える雰囲気の大切さ》に気づき、こうした援助におけるバーバルおよびノンバーバルなコミュニケーションが看護師と患者との関係性の構築を助けることを学ぶのである。また、援助を通して《看護師の緊張は患者に伝わる》、また、《看護師の自信のない態度は患者を不安にさせる》ことから援助における相互関係について再認識する。さらには、《看護師の身だしなみの乱れは患者に不快感を与える》こと、逆に《看護師の良い身だしなみは患者に安心感を与える》ことをSPとの関わりを通して学んでいる。これらにより、学生は患者との関係性なしには援助そのものが成立しないということや、良好な関係性を築くコミュニケーションの必要性の理解を強め、看護師自身の身だしなみ、言動についての学生の態度面の内省を促すことが特徴づけられた。

以上から、SPを活用した演習で独自に抽出された3カテゴリは、模擬患者の「リアリティによる効果」であり、看護教育におけるSPの活用は、学生が看護師として学ぶべき知識・技術と合わせて、看護のあり方を考える契機になることが明らかになった。

## 2. 学生同士による演習およびSPを活用した演習における気づき・学びの比較

### 1) 【患者のより良い援助を考える】、【学習の動機づけを得る】ことについて

SPを活用した演習において【患者のより良い援助を考える】ことは上位2位であるが、

学生同士による演習よりも3サブカテゴリが多く抽出された。そして、《援助時の安全・安楽な体位の工夫》は約5倍のコード数が示された。口腔ケアの実際においては、ブラッシングの方法よりも患者にとっては体位自体が苦痛であることもあり得るため、《援助時の安全・安楽な体位の工夫》は援助の重要なポイントの一つとなる。また、《患者の羞恥心に配慮した援助》は約4倍のコード数が示され、これらは、SPの援助を通して、学生はペーパー上の患者では体験できない実際のコミュニケーションの中から事実を捉え、「今の患者さんの状態や気持ちを理解することによって支援を考えることが必要」<sup>18)</sup>であることに気づき、学びを得るためであると考え。したがって、SPを活用した場合は、学生をより刺激し、多角的かつ実践的な視点での気づきや学びを得ることを明らかにした。

同様に、SPを活用した演習では【学習の動機づけを得る】ことは上位1位で、かつ学生同士の演習よりも4サブカテゴリが多く抽出され、全体のコード数は約3倍以上であった。また、《練習の必要性を認識する》は約5倍、《患者に良い援助を実施したい》は約2倍のコード数が認められた。本研究結果において、この【学習の動機づけを得る】ことは、SPを活用した教育効果として最も顕著に示されたが、これもまさにSPのリアリティによる影響であると考え。学生の行った援助によりSPが苦痛を表す場合、学生はより確かな知識と技術を習得する必要性を素直に感じる。また、学生が行ったケアに対するお礼をSPが表すならば、自然と喜びの感情が湧き、さらに《患者に良い援助実施したい》という気持ちが生まれる。これは、初めて出会うSPへの援助は日常とは異なる学習環境が作り出す効果<sup>1)</sup>であり、学生自身の学習姿勢を問いなおす機会となるため、学習を内発的に動機づけることが示唆された。

### 2) 【口腔ケアの難しさ】、【援助時の声か



【必要性と効果の理解】について

【口腔ケアの難しさ】のコード数の変動については、以下の2点が考えられる。第1は、口腔ケア技術の習得度の違いである。

「口腔ケア演習」は、第1回目に学生同士で看護師役・患者役を交互に行った後、第2回目にSPを活用する演習の計2回実施した。したがって、口腔ケアの技術に対する難易度はSPを活用した第2回目では軽減したと考える。

第2は、上述したSPのリアリティによる効果である。模擬患者への援助は、口腔ケアの知識・技術の提供と合わせてSPとの関係性に焦点を置く態度について強く意識されることによると考える。【援助時の声かけの必要性と効果の理解】の変動についても同様である。《援助時の声かけの必要性》および《声かけにより患者は安心して援助を受けることができる》で約6倍、《声かけのタイミングを考える必要性》で約3倍のコード数が示すように、SPのリアリティにより学生は、より良い援助を行うための【援助時の声かけの必要性と効果の理解】について多様な気づきや学びを得ている。

### 3) 看護基礎教育におけるSPを活用した教育プログラム開発の必要性について

本研究結果から明らかになったSPを活用した演習における特徴的な教育効果である【良好な人間関係を築くコミュニケーションの必要性】【看護師の身だしなみ、言動は患者との関係に影響を及ぼす】【援助は看護師—患者の相互関係から成り立つ】の3カテゴリ。そして、SPを活用した演習において【患者のより良い援助を考える】、【学習の動機づけを得る】ことにより多く、より多角的かつ実践的な気づきや学びが得られたこと。各演習における【口腔ケアの難しさ】【援助時の声かけの必要性と効果の理解】の変動の理由には全てSPのつくり出すリアリティ<sup>4)</sup>が影響していた。

また、看護ケアは、看護師、患者（たち）、

および/または患者の家族や重要他者が参加する相互作用過程の中で行われる<sup>19)</sup>ため、SPのリアリティによって、模擬患者がつくり出す現実<sup>10)</sup>に否応なく巻き込まれ、感情が揺さぶられるという効果を持つSPを活用した教育は、コミュニケーションの教育に多く適用され報告されている<sup>1,2,9,12)</sup>。

これらの特徴や研究結果をふまえ、人を対象とするケア技術を習得していく過程は極めて複雑であるから、基礎となる知識、スタンダードな手技、生体として想定される反応への対応、生きた人間 個別性のプロセスからなる看護における技術習得過程のモデル<sup>20)</sup>および大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告<sup>21)</sup>より提示された学士課程版看護実践能力を鑑み、SPを活用した効果的な教育プログラム開発の必要性が示唆された。今後もSPを活用した教育効果の検討を積み重ね、教育プログラムの基礎となる資料を蓄積していくことが課題である。

## V 結論

SPを活用した「口腔ケア演習」の教育効果を学生同士およびSPを活用した場合の各演習記録から比較・検討した結果、以下のことが明らかになった。

1. SPを活用した演習においては、SPのリアリティによる影響から学生同士で行った演習に比べ、より多角的な角度から強く学習の動機づけを得ることが示唆された。
2. 看護基礎教育におけるSPの活用は、学生が看護師として学ぶべき知識・技術と合わせて、看護のあり方を考える契機となり、SPのリアリティによる効果が示唆された。
3. SPを活用した教育では、看護基礎教育において求められている看護実践能力を鑑み、効果的なコミュニケーション能力の育成も考慮した教育プログラム開発の必要がある。

## 謝辞

本研究にご理解とご協力をいただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究の一部は、第32回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

## 注・引用文献

- 1) 鈴木玲子、高橋博美、常盤文枝ほか. コミュニケーション学習にSP (Simulated Patient) を取り入れた教育技法の開発. 埼玉県立大学紀要. 2002; 4:19-26.
- 2) 鈴木玲子、高橋博美、藤田智恵子ほか. 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討1-SPを取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開-. 看護展望. 2003;28(3):46-52.
- 3) 加悦美恵、飯野矢住代、河合千恵子. 基礎看護学におけるSP参加型の授業と臨地実習の連繫-学生の臨地実習のふりかえりから. 日本看護科学会誌. 2006;26(2):67-75.
- 4) 本田多美枝、上村明子. 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察-教育の特徴および効果、課題に着目して-. 日本赤十字九州国際看護大学IRR. 2009;7:69-77.
- 5) 嶋根久美子、瀬瀬美保子、榎本康世ほか. 看護基礎教育における学内技術演習の検討-模擬患者への基礎看護技術演習の効果-. 日本看護学会論文集看護教育. 2005. 36:12-14.
- 6) 和住淑子、山本利江、齊藤しのぶ. 模擬患者への看護を初めて体験した初年次看護学生の体験内容と認識の特徴. 千葉看護学会会誌. 1999;5(2):49-54.
- 7) 植村研一. Simulated Patient. 医学教育. 1998;19:218-221.
- 8) 遠藤順子、澁谷恵子、菅原真優美. 看護基礎教育における模擬患者を活用した教育効果の検討-口腔ケア演習を通して(第1報)-. 新潟青陵学会誌. 2012;4(3):33-42.
- 9) 肥後すみ子、奥山真由美、太湯好子. SP導入によるコミュニケーション演習に基づく学習効果と教育技法の評価. 岡山県立大学保健福祉学部紀要. 2005;12(1):33-43.
- 10) 和住淑子、山本利江、青木好美ほか. 模擬患者への看護体験による看護学生の認識の発展. 千葉大学看護大学紀要. 2003;26:63-67.
- 11) 土蔵愛子、大学和子、西久保秀子. 模擬患者による看護技術実技試験における評価に関する検討. 聖母女子短期大学紀要. 2003;16:65-73.
- 12) 堀美紀子、村松千鶴、淘江七海子. 模擬患者を導入したコミュニケーションスキルトレーニングの学習効果. 香川県立医療短期大学紀要. 2004;5:105-114.
- 13) 大久保祐子、里光やよい、豊田省子ほか. 標準模擬患者を用いた基礎看護学における客観的臨床能力試験の試み. 日本看護学教育学会誌. 2003;13:235.
- 14) 清水裕子、大学和子、野中静. 基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み. 聖母女子短期大学紀要. 2002;15:53-63.
- 15) 豊田生子. 看護教員がSPとなってわかったこと-私の模擬患者体験-. 看護教育. 2004;45:828-833.
- 16) 任和子. 模擬患者の経験から(特集 看護教育におけるSP(模擬患者)活用法の可能性. Quality nursing. 2001;7:572-576.
- 17) 遠藤順子. 指導に生かす! 実習記録の評価法. 看護展望. 2010;35(10):11-16.
- 18) 刑部万寿美、原田千代子、吉田千鶴子. 模擬患者(Simulated Patient: SP)参加型授業の効果について. 豊橋創造大学紀要. 2012;16:115-123.
- 19) Anita W.O.Toole,Sheila R.Welt, 池田明子、小口徹、川口祐子ほか. ペプロウ看護論-看護実践における対人関係理論-. 46. 東京:医学書院:1996.
- 20) 日本看護系大学協議会. 平成12年度事業報告書. 2001;11-12.
- 21) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告. 2011;13.